



陶山神社の秋季皇霊祭 平成13年9月23日 スケッチ 深川 巖氏

すやま通信

〒844-0004
佐賀県有田町大樽
2-5-1

陶山神社
社務所

(0955)(42)3310
FAX (41)1061
年4回6500部発行



挨拶

その中で特色ある今年の出し物を二つほどご紹介したいと思います。

①好年部の参加

少子高齢化の今日、人口の四人に一人は六十五歳以上になるとする近い将来の日本・有田町であります。少年少女と共に六十五歳以上の好年の皆さん「好年部」の参加を得て踊り部を編成して皿山祭りに出場します。またお祭り広場において皿踊り用の皿を見物の皆さんの分まで(百枚程度)用意して見物のお客さんも一緒に皿踊りを踊っていただきたいと計画しております。更にその皿は記念としてお持ち帰りいただく予定です。

②李参平さんも皿踊り

八月四日、日本磁器発祥の地、泉山磁石場で日韓合作映画「白神渡海」の有田大ロケーションが有田町民二〇〇余名のボランティア参加で行われました。

映画の主役を演じられた李参平公を韓国よりお招きし、パレードに特別出場してもらいます。また、東京より「お松」役の山口眞有美さん(泉山出身)にも参加してもらい華を添えてもらいます。

「李参平さんも皿踊り 老いも若きも輪になって」

町民・区民あげて「おくんち」「皿山祭り」を盛り上げたいと計画しております。町民各位のご声援をお願い申し上げます。

八区区長 岩永正徳

小櫻さんは「きつと岡本宮司さんが、高天原から、この映画の成功を見守って居られ、宮司さん(私)に引き合わされたでしょう」と言われ喜んで居られました。

馬場さんに取材した中にも、撮影時の有り様のない天の手助けや、助作役に抜擢される時、思いも寄らない関係の人脉により決まったことなど不思議なことばかりで、点から一本の線に繋がりました。

この映画には、何か神憑りのなものがあるようです。これから先の日韓関係の友好と有田焼の繁栄が導き出されるのではないかと期待いたしております。

椎谷神社秋の願成就



9月16日願成就 外尾町区民総出で神社周りの山払い除草の奉仕をする

九月十六日、椎谷神社で願成就が行われた。毎年、春秋の彼岸中日に一番近い前の日曜日に区民総出で行われる外尾町の恒例行事である。

『皿山代官旧覚書』(三〇二頁)の文化二年(一八〇五)の状に「当春以来、山中の者共所々に於いて、願成就籠もりにこと寄せて酒宴のみにて相催し候」と願成就のことが記されている。当地方では至る所で神社拜殿で、各家庭から料理を持ち寄り、御供米さんを神さまにお供えした後、それを分け合い、神さまのお力を頂くという意味で食します。

今はその習慣は担当班が竹輪ナマスを用意するようになっていました。両彼岸に各家庭で、先祖の墓を清掃し、お参りすることは周知のことですが、神社参りも同様で、「命日を五〇年過ぎた先祖は、氏神様の本に鎮まり、各家庭と地域が無事平穏で有るように守って頂く」という信仰に基づいています。外尾町の皆さんが行う労力奉仕は、地域発展に重要な意義を持つものです。

外尾町の皆さまに感謝、感謝。

崇敬会入会者御芳名

【准会員】大串政治様

初穂料奉納者御芳名

- 有田町古木場区・有田町外尾町区・石川裕子・井上萬二窯・今井佳苗・今右衛門窯・岩尾對山窯・采女和憲・浦郷隆幸・江原照男・大井出秋吉・大倉総合開発(有)・柿右衛門窯・(株)華山・金子太陽・岸川亮・木戸舟里・木原彰宏・桑原英俊・源右衛門窯・幸楽窯・(株)香蘭社・古賀圭介・斉藤直美・志方由美・松華堂(株)・賞美堂本店・白濱美保子・神右衛門窯・仁窯・しん窯青花・親和陶磁器(株)・(有)真右衛門窯・青華会・高森瑠夏・田崎尊・田代りこ・館林建設(株)・館林古琳庵窯・土本龍之介・土岐稔久・徳幸窯・中島綾香・野田京聖・馬場恭太郎・原田哲也・久野寛奈・廣大樹・廣琢也・深川製磁販売(株)・深川製磁(株)・福島輝夫・(株)藤正・前田食品工業(有)・丸兄商社(株)・宮田未央・森商会(株)・山口晴也・山下進・山下良枝・山下裕之・山下光利・山下

芳之・ヤマトク窯(株)・葉千春 以上は九月の初穂料奉納者です。「初穂料」とは、日頃、神様のご加護を以て無事生活ができることを感謝し、その真心を初穂に換えて奉納されたものです。

この初穂料は、神社運営の社費として有難く神納し、有意義に運用させて頂きます。記載漏れや間違いがありましたらご連絡下さい。(音順・敬称略) 編集後記

なお、本誌刊行の趣旨に賛同を頂き井上萬二窯・今右衛門窯・岩尾對山窯・大倉総合開発(有)・柿右衛門窯・(株)華山・源右衛門窯・幸楽窯・(株)香蘭社・松華堂(株)・賞美堂本店・(有)真右衛門窯・しん窯青花・親和陶磁器(株)・館林建設(株)・徳幸窯・花もよう・深川製磁(株)・深川製磁販売(株)・(株)藤正・前田食品工業(有)・丸兄商社(株)・森商会(株)・ヤマトク窯(音順)各位様から、ご協賛を賜り刊行の援助を頂きました。紙面を以てお礼を申し上げます。

次回五号は、飛び入り記事が無い限り、来年の正月か二月頃に予定いたします。

本号は、お供日と白神渡海撮影の特集です。神事町八区の注連元・区長・実行委員長・各役員さんたちより趣向を凝らした企画で行われます。ご期待ください。映画撮影では「助作」役の馬場大和さんに寄稿していただきました。巻頭 陶山神社の秋季皇霊祭のスケッチ 深川巖(深川製磁(株)相談役・芸術室長)さんに描いて頂きました。有り難うございます。

「李参平さんも皿踊り 老いも若きも輪になって」をスローガンに平成十三年神事当番町八区は二〇〇〇余名の

区民総力を上げ練習・準備にと、がんばっております。

は「棒読みでセリフを言うのは簡単だけど、そこに感情を込めるのが難しいんだ。もう少し時間があって日本語の勉強が出来たらなあ」と言われ、外国の人からしてみれば日本語の「ぞ・じょ」の区別が



お松の父、神官役で熱演する篠原町長

付かないとかアクセントが難しいと相当悩んでいましたが、さすがプロです。彼は本番になると見事な演技をされ感心いたしました。

不思議な幸運に恵まれました。それは監督が「雨を撮りたい」と言うのと、二〜三分前の青空がにわかには荒天になり雨がザーッと降ってきた、また「雷がほしい」と言えば、ピカッ、「ゴロゴロ」と雷鳴が轟いたんです。そのシーンを取り終わるとウソみたいに雨が止むんです。冗談みたいな話ですが、本当にそんなことが起

りスタッフ一同ビックリし、この映画自体に李参平公が時空を越えて支援してくれていると確信しました。印象深かったのは篠原町長の演技です。発声が綺麗で声を通り、衣装もはまって違和感がなく、演技も上手で驚かされました。李参平の妻(お松)のお父さん役で、まさに威厳のある父というイメージどおりの役回りでした。

お松役の山口さんは泉山出身の俳優さんで、和服のよく似合うとても気さくな人で、色々助言をして頂き本当にありがたかったです。今回、スタッフや有田の人達の映画に対する熱心さ、真剣さを見ると一つの事に皆が一丸となり取り組み成し遂げた感動！、本当に素晴らしいものです。



平成13年8月2日陶山神社で映画「白神渡海」撮影の成功祈願祭をするスタッフ一同

映画「白神渡海」は不思議なご縁

何と私(宮司)が二十年前、熱田神宮に十年間奉職し、恩師と仰ぐ直前宮司の故岡本健治さんと懇意で「今回の『白神渡海』の映画の脚本は勿論、自身の人生の指導など何かにつけ相談に乗って頂いていましたよ、台本の中の本阿弥光悦の台詞「慎而莫怠・つつしみてな おこたりそ 慎みの心を以って、怠るな・・・ 絶えず自己を厳しく反省して、勤めよ！」は岡本宮司さんから頂いたものです」と語られました。

今も奥様の恒子さんとは恒に音信を暖められる仲とのこと、つい奥様が懐かしくなり深夜にも関わらず電話をされ、私も代わる代わる電話に出て、この奇遇さに驚き、お互いに敬愛する岡本宮司さんの事を思い出し涙いたしました。

仲良くならないと政治も動きません。大衆が仲良くならなければならぬ。」と言われました。

今回の映画で、日本人と韓国人との溝が少しでも埋まり、互いに助け合える事を切に願います。最後になりますが、協力をして頂きました有田の皆さん本当にありがとうございました。

紹介 馬場大和くんは、昭和五十二年生まれで、同志社大学を卒業後、真右エ門窯に勤務している。

撮影中盤の八月十二日、脚本家の小櫻景如(景子)さんが夜半に、撮影の衣装(装束)を借りに社務所まで来られました。

この時、いろいろ話をしていく中に、小櫻さんが伊勢の神宮皇学館大で、神職の資格を持っておられ、学生時代には名古屋の熱田神宮にお手伝いによく行っていたと聞きました。



平成13年度 八区お祭り実行委員会

注連元 前田節明 区長 岩永正徳 実行委員長 岩政弘信

総務(外尾町) 梅田洲生・若菜宏啓 会計(外尾町) 林 大捷・平川久博

(丸尾区) 実行副委員長 岩永正誠 委員丸尾役員 監査・相談役	(外尾町区) 実行副委員長 池田恒男 委員外尾町役員 監査・相談役	(外尾山区) 実行副委員長 国本啓美 委員外尾山役員 監査・相談役	(赤坂区) 実行副委員長 西 昭夫 委員赤坂役員 監査・相談役
◎女子部 4班 部長 林 孝子 踊手120名 随伴35名	◎青年部 3班 部長 池田一文 踊手50名 随伴35名	◎好年部 1班 部長 松村清重 踊手40名 随伴20名	◎少年少女組 3班 部長 前田宗徳 踊手120名 随伴100名
◎浮立部 1班 部長 松下敏信 踊手50名 随伴40名			

総勢 踊手380名 随伴者230名 裏方140名 総合計750名

八区当番町の心意気

十年前のお供日の当番の時は、各部落主体で行いましたが、今回は部落の垣根を取り去り、八区全体で祭りを楽しもうと企画しています。各部とも有田血山節・有田音頭をアシ

ンジした血踊りに、河内男節などの所望踊りいたします。奉納踊りは、十六日九時 陶山神社で女子部、九時半 八阪神社で青年部、椎谷神社で十時に好年部、十二時半に少年少女組、時間未定で浮立部が行います。

平成13年度 10月16日お供日「おみこし」巡幸のご案内

祭典 午前8時30分 出御祭 陶山神社神殿
午前9時30分～午後4時40分 各神社へ巡幸
午後5時00分 還御祭 陶山神社神殿

Table with 5 columns: 順番 (Order), 場所 (Location), 到着時間 (Arrival Time), 滞在時間 (Stay Time), 出発時間 (Departure Time). Lists 29 stops across various locations like 陶山神社, 上幸平, 泉山, etc.

◎なお、当日、雨天の場合は、「おみこし」の巡幸を中止して、雨儀祭典のみ行います。

雨儀祭典時間、陶山神社 9時 南川良天満宮 10時 椎谷神社 11時

Table listing staff for the rain ceremony at various locations, including roles like 町事 (Town Affairs) and 町御供 (Town Offering).

- ◎出御祭 (しゅつぎょ) 午前8時30分 ご神殿からご分霊をお神輿に移します
◎ご巡幸 (じゅんこう) 午前9時30分～16時40分 氏子・崇敬者の処に神様が巡幸され町内の繁盛と家内安全を祈ります、どうぞ皆様お参り下さい。
◎還御祭 (かんぎょ) 午後17時 お神輿からご神殿にご分霊がお帰りになります。
◎17日は「皿山祭り」に有田焼工業組合の有志により有田焼繁盛を願って神輿担ぎが行われます。

寄稿

無事終えました助作役 馬場大和



真工衛門窯自宅にて「白神渡海」助作役出演の感想を聞きました

「白神渡海」うらばなし

私は李参平さんが有田焼の祖であることは知っていましたが、具体的にどんな人物で何の功績があったか詳しく知りませんでした。今回、李参平さんの一番弟子「助作」役で、「白人渡海」の映画に出演して、有田焼創生に重要な人物であったことを改めて体感することができたように思います。



有田町磁石場で200名以上の町民エキストラに感動いたしました

簡単にいえば李参平さんは、見知らぬ土地で白磁の素となる陶石を求め続け、藩内をくまなく探索し、有田泉山で陶石を発見します。その後、磁器焼成に関する難問も試行錯誤の上解決し、白磁を焼き上げることに成功しました。あれこれ説明するより完成した映画により「すばらしい有田焼と李参平さんの偉業」を実見していただきたいと思えます。

出演して感じたことは、エキストラで町民の皆さんが積極的に参加協力されている姿を見て自分も「どうころろでくんばい」と圧倒されま



李参平公と助作 佐賀藩領内を白磁石を見つける旅に出る

した。特に石場のロケでは二百人の熱気を感じ、この映画に掛ける皆さんの心意気が伝わってきました。私はこの助作役を通して、普通では体験できない江戸時代にタイムスリップして有田の歴史体験、出演者や沢山の関係者との交流など、ほん

の前で魅入られたかのように立ちつくされ、何かを感じられたようです。今思えば、その後の呉さんは別人になりました。京都撮影の頃の呉さんと、李参平像を見てからの彼とは、丸みのあった顔も少し細くなり李参平公が乗り移ったような威厳のある顔つきとなり風格も出てきました。それからというもの彼は毎日陶山神社の宮司さんから頂いた李参平さんの写真に手を合わせお祈りをして撮影に向かわれていました。一番苦労されていたのはなんと書いても言葉だったようです。呉さん



ついに有田泉山にて白磁石を見つけ手を取りながら歓喜する李参平公と助作

神になった李参平

有田焼の創業と李参平

国際日本文化研究センター教授

小松 和彦

李参平公陶像



源右衛門窯古伊万里資料館蔵

李参平は、長らく実在の人物なのだろうかと疑われていた。だが、現在では実在の人物である「金ヶ江三兵衛」と同一人物であろうというのが定説になっている。『有田町史』などによりながら、その足跡をたどってみよう。

秀吉の命令で朝鮮に出兵した肥前の大名・鍋島直茂（佐賀藩祖）の軍勢は、朝鮮半島の忠清道に上陸して各地を転戦したが、秀吉の死去によって本国に召還される。このときに朝鮮の陶工たちが鍋島軍に伴われて日本にやってきた。かれらははじめ佐賀城近くで陶器を製作した。この

ときにかれらが焼いたのは、唐津系の陶器であった。

その陶器は、すぐに古田織部などの茶人たちのあいだで評判になった。たとえば、慶長十九年（一六一四）に、京都に上がっていた藩主・鍋島勝茂が国元の鍋島生三に送った手紙には、「京都では高麗茶碗が大流行だ。いま自分の手元にはそれがひとつもないので、高麗茶碗であればなんでもいいから、所持者を探して買い取り、至急送れ」と書かれている。佐賀の高麗人（朝鮮人）が焼いた茶碗が「高麗茶碗」として引張りだこになっていて、佐賀藩主にそれを所望する人がいかに多かったかを伝えている文面である。

このときは、高麗人が焼いた茶碗ということでも人気があったわけである。それから十年後の元和十年（一六二四）になると、磁器という名称が出てくる。勝茂の弟で鹿島藩主の忠茂が同じ鍋島生三に送った手紙には、「青磁の今焼茶碗がとても欲しいので、むずかしいかもしれないが、二つほど焼いてもらって欲しい」と書かれている。これはおそらく有田で焼かれたものであろう。『有田町

史』は、こうした事実から、この十年のあいだに有田で磁器が焼かれるようになったのではないかと推測している。

ところで、李参平が有田の泉山で良質の白磁石を発見して、天狗谷で磁器の焼成に成功したのは、元和二年（一六一六）のことだとされている。これは、承応二年（一六五三）に、李参平こと日本名・金ヶ江三兵衛が、鍋島藩家老の多久家に提出した文書によっている。

それによると、李参平（金ヶ江三兵衛）は高麗（朝鮮）から渡来して数年間は家老の多久長門守に預けられたが、許しを得て多久から総勢十八人で有田の皿山に移住し、三十八年になる、という。この申告内容から逆算して、元和二年となったのである。

また、この文書には、各地からここに集まって来た者は現在百二十人おり、これらの者すべてが三兵衛の支配下にある、とも述べられている。このことから浮かび上がってくるのは、李参平が皿山に入植してから約四十年のあいだに、続々と陶工グループが入植して焼き物の生産に従事

するようになり、李参平がそれらの諸グループを統括する地位にいたったことである。

李参平の出身地が高麗のどこかは定かでないが、鍋島の軍勢が朝鮮半島各地を転戦していった先で、かれらを「発見」したのであった。そのときの事情は、李参平の子孫である六代目・金ヶ江三兵衛とその伯父の久四郎が提出した「先祖の由緒書」によって知ることができる。それによると、李参平の履歴は次のようになる。

慶長年間（一五九六―一六一五）に秀吉が高麗に出兵したとき、鍋島家の軍勢も彼の地に出陣した。攻め口を工夫していたときに、鍋島直茂の軍が不案内な山道に入り込んでしまった。はるか向こうに小さな家が一軒あり、家来がそこに立ち寄って道を尋ねた。すると唐人（高麗人）が三人出てきて道を教えたが、言葉が通じなかった。しかし、身振り手振りであらうかというの意図がわかったので、その道筋から攻め入り、あとから大軍勢が続いて、大勝利となった。その後、戦いは終わり、鍋島の軍勢も帰国することになり、乗船場で、

直茂は先の道先案内をしてくれた唐人を呼んで褒美の言葉を与えた。そして名前と住所を聞き、さらにその職業を尋ねた。二人は農業と答え、あとの一人である参平は陶器を作っていると答えた。

参平が陶器を作っていることに興味をもった直茂は、山案内をしたので日本の軍勢が撤退したあと、土地の残党から報復を受けるかもしれない、日本に渡って家業の陶器造りをしたらどうか、と熱心にすすめた。その言葉に従って当地にやってきた。

日本に来たとき、多久長門守に預けられ、有田郷の乱橋という所に住み、最初はここで開墾をして生計を立てた。その当時、皿山はたいへんな探山で、人家もまばらで、わずかな田畑を耕作していた。

参平は許しを得ているいるなところを見て回り、現在の泉山に磁器にするのに最適な石があるのを発見した。そこで、水と薪の便がよかった天狗谷に窯を築き、焼き物を始めた。藩主はこれを珍しいものだとよここび、家老は下女を参平の妻として与えた。そして、参平が子をもうけたときに、参平の出身地の地名が「金

ヶ江」であったのにちなんで「金ヶ江三兵衛」という苗字と名前を名乗ることを許された。

『肥前陶磁史』の著者・中島浩気は、韓国忠清南道公州郡の鶏籠山腹に「金江島」という陶山があり、朝鮮出兵の頃に盛んに陶器の製造がおこなわれていたので、この地が李

参平の故郷ではないかと推測している。



映画「白神渡海」神となる李参平のロケーション主演 李参平役の吳光祿（オ・クワンロク）さん

わたしたちが留意しなければならぬのは、右の李参平の履歴は六代目の子孫が書いたものだということである。従って、どこまでが史実であるかはわからない。とくに鍋島直茂が親切に日本への渡航を勧めたので、その誘いに応じて渡来したと述べているが、事態はその逆で、李参

とがわかる。実際、上述のように、佐賀城外で焼き物を作ったという記録があるから、複数の陶工が渡来してきたのであった。文化の交流は、友好的なかたちで進められることもあるが、このように、戦争を契機としたかたちでも交流が生じるのだということ、この李参平の事例は教えている。李参平は、有田の竜泉寺

の過去帳によれば、明暦元年（一六五五）に没した。享年七十五歳であったという。

書籍紹介



『神になった人びと』表紙

この小松和彦先生の論文は、有田町に連れて来て取材されたものです。淡交社のご好意により『神になった人びと』（小松和彦著 株式会社 一、八〇〇円）陶山神社李参平の論文の一部を抜粋させていただきます。

この本は、月刊誌『淡交』に、平成十二年新年号から十二月号まで連載されたもので、菅原道真・徳川家康・豊臣秀吉など偉業を成し遂げた人物が神社に祭られている所を研究されています。人が神に祭られる理由、それを知らたい方はどうぞこの本を購入して勉強してください。